

建築家・前川國男による屋外空間の展開

塚野 路哉 特任准教授 (TSUKANO, MICHIIYA 人間生活学部生活デザイン学科)

前川國男が屋外空間に出現させた「エスプラナード」には 都市の過密化を解消するためのヒントが隠されている

塚野研究室では、建築家・前川國男(1905-1986)が設計活動を通して模索し続けた手法の展開を明らかにすることを目指し、特に屋外空間を取り上げて調査を行うとともに、それらの通時的な変遷の分析に取り組んでいます。

前川國男は、CIAM(近代建築国際会議)設立者の1人であるル・コルビュジエ(Le Corbusier, 1887-1965)に師事しました。ル・コルビュジエは、第二次世界大戦後の都市計画思想の一端を確立した人物であり、日本近代の建築家にも多大なる影響を与えました。例えば、ル・コルビュジエに師事した坂倉準三(1901-1969)や吉阪隆正(1917-1980)を始めとする日本人建築家は、ル・コルビュジエの建築理念に基づく「アテネ憲章(CIAM: The Athens Charter, 1933)」などの思想を、国内の都市計画に応用しています。

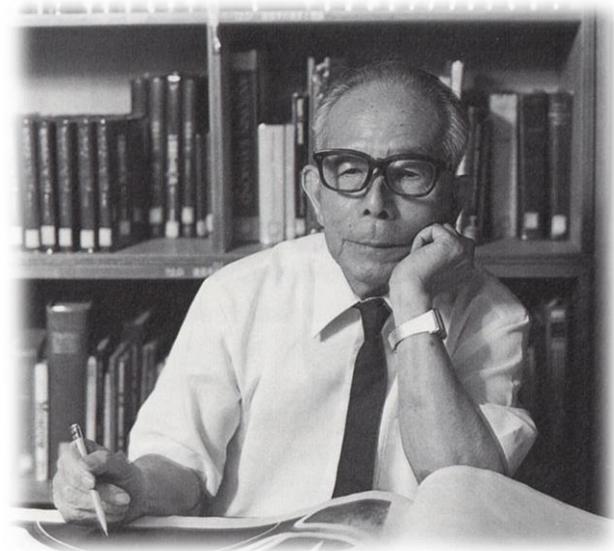
こうした同門の建築家らとは対照的に、前川國男は一度も都市計画を構想していません。一方で、屋外空間に独自の手法を構築するとともに、その導入による周辺都市の再構成に、生涯に渡って取り組みました。

前川國男は、高度経済成長期以降の日本において、フランスのカルーゼル広場(Place du Carrousel)のように自由に流入することの可能な公共広場を創出しようと試みます。しかしながら、敷地が狭隘な日本において、カルーゼル広場のように浩々たる土地を用地として確保するのは容易ではありません。そこで彼は、自身が従来から屋上庭園で模索していた立体的な動線を応用することを思いつきます。この手法は、ル・コルビュジエの建築作品の一つであるサヴォワ邸の屋上庭園の空間構成を応用したものであり、前川國男独自のものです。

前川國男は、何を意図して屋上庭園の手法を地上に応用したと考えられるでしょうか。サヴォワ邸の屋外空間を公共庭園として読み替えるという作業を、屋外空間の理想を地上の庭園へと展開せしめる行為、として解

釈した場合、それまでの屋外空間には見られなかった新たな公共性・社会性を生み出している、とも評価できるのではないのでしょうか。

今後の研究では、前川國男の遺した屋外空間の特徴を作品ごとに観察・分析して、その変遷を通時的に跡づけることにより、戦後の高度経済成長期に創出された前川國男の設計手法の全容解明を目指したい考えです。将来は、本研究により得られた知見を、日本各地の都市で進行する過密化等の今日的課題の解消に役立てることにより、豊かな近未来都市の実現に貢献したいと願っています。



写真：前川國男、出典：生誕100年・前川國男建築展実行委員会『建築家前川國男の仕事』美術出版、2006、p.25